## Fumimaro WATANABE:

the Nikāya and Abhidhamma Philosophy and its Development in

浪 花 宜 明

其类、最高心理学、不够种的杂物の四个三个唯古言。[1]即の

るという思考態度はすでに原始経典の中に認められる。 いる。研究者の一致した見解によれば、アビダルマは原始経典 と同時に、アビダルマ思想を発達させた思考方法にも注目して より、 始経典からアビダルマへの思想的発達を跡づけているが、それ また桜部建『俱舎論の研究』「第一部」の簡潔でしかも明解な ている。木村泰賢『小乗仏教思想論』はその古典的名作であり の学者は、説一切有部のアビダルマ論書の発展をたどることに れたかを論じた著作は数多い。特に漢訳典籍を駆使しうる日本 教説の分析と総合とによって成立・発展した。分析し総合す 『有部阿毘達磨論書の発達』は、アビダルマの先駆となる漢 アビダルマ思想がいかなる起源から、どのようにして形成さ アビダルマ思想の発達についてすぐれた研究成果をあげ 研究者に多大の資益を与えている。これらの研究は原 福原亮

の原始経典を網羅している。

ている。ちなみに WARDER は本書の Foreword を書いている。 が彼の研究方法と研究成果に負うところの大きいことを物語っ 処には WARDER の説が引用され、かつ受け入れられて、本書 WARDER 博士のもとでの研究が母体となっている。 本書の随 この書は著者のトロント大学 Ph. D. コースにおける、A. K. 典からアビダルマへの発展を明らかにせんとする研究である。 表わされる。その論理の型の変化を追うことにより、原始経 を当てたものである。思想はある種の論理の型にしたがって sophy and its Development in the Nikaya and Abhidhamma を離れ、教義が語られ或いは討論されるときの論理の構造に光 もアビダルマの成立を論じたものであるが、それは個々の 以下に紹介する Fumimaro WATANABE (渡辺文麿): Philo-

すの中で見られる《Winnessa の意味しまの表 いは程度、同様、大阪・資産 ここので

本書は二部十二章からなる。

Part I The Origin of Abhidhamma Philosophy

- ۳ Introduction bundle, 空影響學多。 緩和過程
- 2 On the Polysemy of the Word 'Dhamma'
- The Conception of Abhidhamma and its cteristics www TOCASS SETANGER Chara

ω

- Abhidhamma and Mātikā
- Part II The Development of the Dialogue Form The Systematization of Mātikās

57

- 6. The Method of Progress of a Dialogue and the Four Panhapyakarana
- 7. Metaphysical Questions and Tetralemmas
- 一心 8年Takka and Dhammatakka 具、 トコメチト 自原名落電
- 10. Logical Arguments in the Dialogue (Sutta)

Forms of Reasoning and Argument

Kathāvatthu and the Vijnānakāya

GER: Pali Dhamma, 1921) はパーリ経・律の中の dhamma gen Gegebenheiten」とし、STCHERBATSKY は「存在の要素 少ない。№に相当する dhamma は蘊・処・界に含まれる色法 分類は相互に関連していて理解しやすく、学者の間にも異論は dhamma の語義の検討から始める。ガイガー (M. u. W. Ger-にあって、それを成立せしめている本質の意味で、それを「超 とする。また O. ROSENBERG は、 H.v. Glasenapp は「合法的な所与の事実 die gesetzemässi する dhamma については学者の間で意見が分れる。 E. Lamo-した dhamma である (DA. I. 99; DhpA. 22)。この分類に属 などであり、Buddhaghosa が nissatta 或いは nijjīva と定義 真実、最高の実在、№経験的事物の四つに分類した。 の語を精査し、□法則、法(Recht)、規準、教え、□教え、□ 第一部はアビダルマ思想の起源とその形成を論ずる。著者は はそれを「存在の現象 phenomène de l'existence」とし、 Conclusion小毛仏教思想論。はその古典的名件 存在を構成する要素の背後 

めるちアピダッマへの発展を明らかにせんとする研究である。

3, 1971) において一つの結論に達している。即ち彼は今問題に ed.)。本書の著者は WARDER の説に従い、dhamma に(1) いは起源、同様に法則と真理とを暗示する。……それはニカー している dhamma を 'principle' と理解する。彼は言う。 mma and Date" (Journal of Indian Philosophy. Vol. I. No 桜部建『倶舎論の研究』七六―七七頁)。A. K. WARDER はそ 越的持者」或いは「真実在的不可認識的基体」と規定した(Cf truth、② doctrine、③ morality、④ principle の四義を認 の意味を① doctrine、② principle、③ quality or predicate 十分な柔軟性を持っている」。WARDER は最終的に dhamma ヤの中で見られる dhamma の意味の重複或いは包含を許すに るものの内在を期待させない。それは実在する何かと、原因或 1970) において dhamma について論考を重ねて来たが、"Dha. (in the later logic) の川ついする (Indian Buddhism 2nd 「'principle' という語は基体 (substance) 或いはそれに類す Introduction to Pali (1963), Indian Buddhism (1st ed

mma とは「すぐれた dhamma」を意味するとするものである。mma とは「すぐれた dhamma を prepositional compound と解し、abhidhamma は prefix abhi を『すぐれた』という形容詞に解し、abhidhamma は prefix abhi を『すぐれた』という形容詞に解し、abhidha-chor、Gerger に始まり CPD に探用されている。第二説るもので、Gerger に始まり CPD に探用されている。第二説るものである。一つは abhidha-chor である。一つは abhidha-chor である。

れらを「すぐれた dhamma」と理解すべき必然性は無く、 ことになった。桜部建博士は、 果は、かえってこの語が二義の間を揺動していることを認める しろ「法に関して」と理解する方がより自然であると結論 た dhamma」と理解した abhidhamma について再検討し、 語を一々検討し、二義を一義に帰せしめようとしたが、その結 I. B. HORNER 博士はパーリ経・律に見られる abhidhamma これはパーリ註釈家の解釈であり、PTSD に採用されている。 り、「仏陀とその弟子達はアビダンマという語のうちに、 ビダンマの名のもとに dhamma についての研究がなされてお な立場にある。著者は abhidhamma の語源的意味は「dhamma についての談論」を意味するとする。 I. 214, A. III. 107, III. 392) においても桜部博士は同様に考 いる。 abhidhamma-kathā なる合成語として現われる三例 似法の分類、 味に解すべきであると言う。また原始経典では法の研究は、 て」ではなく、 から、 原始経典に現われる abhidhamema の語は、 一法につ について」であると言う。しかし原始経典の中では計すでにア え、abhidhamma-kathā は dhamma-kathā と同義であり、「法 哲学的概念を形成していた」と著者は言う。このようである (2)ある法と他の諸法との関係の把握、 ⑤法の配列、という五点よりなされていると著者 「法の深い意味或いは哲学的意味の理解」 HORNER が検討して「すぐれ 本書の著者の理解は微妙 (3)法の分析、 - つ の意 (M. して 7 (1) 1 V

> 学者の多くはこの説は否定的である。何故ならば mātikā は教 研究者に支持されている。 WARDER は言う。 座部と有部の有名な七論)の核としてはたらいている」と著者 事実そのような mātikās はそれぞれのアビダンマ論書(特に上 アビダンマ蔵の simple form であると考えることはできる。 いる。「現時点で matikas をアビダンマ蔵とみなしえない う問題が残るからである。著者はここでも WARDER に従って tika蔵と呼ばれずにアビダルマ蔵と呼ばれたのは何故かとい る。また、mātikā が第三の蔵の原型であったなら、それが である。他方アビダルマは総合とともに分析をもその特徴とす 説・教義の項目であり、教説・教義の総合より生じて来たもの 原型であるとする考え方は の起源として、mātikā に注目する。 GEIGER mātikā がアビダル もこの説をとる。 に始まり、多くの欧米の 日本 7

mātikās 群の原初の形とその発展を追い、アビダルマ蔵への発 る、 る から生じたと言う。 のに分類するが、これらは原始経典における次の如き法の研究 七道品、臼修行の階梯に関するもの、闫存在の分析に関するも 展をあとづけようとする。著者は mātikās を円七覚支・三十 研究する。 とduka(二者一具)を分析配列する、 ④討論の対象となる topic を集める、⑤ tika(三者一具 (2)修行・禅定の段階を定める、 この六種の仕方で mātikās が組織化され、 即ち、山三十七道品を七覚支として総合す (3) 蘊処界などを分析分類す ⑥因果と認識の理論を アビダ

このような見通しに立って、第五章で著者は、組織化された

第四章において著者はアビダルマ蔵あるいはアビダルマ

論書

ンマ哲学が確立されて行った。 形は七覚支であると著者は言う。 組織化された mātikās の原初

## (国)の配列、という主点よりにされて

らかにしようとする。本書の目的と独自性はこの第二部にある。 ける論理の形を分析し、原始経典からアビダルマへの進展を明 仏陀の説法は幾多の機類に応じてなされ、それ故その説法は 第二部では原始経典とアビダルマに見られる問答・討論 にお

仏陀自身が偉大な debater であったこと、③仏陀が弟子達に正 慣があり、討論・論争が自由に行われる環境があったこと、 たらした原因として、ロインド古代に public depating の習 が含まれていることからも理解されうるであろう。教えに対す 問によって答えらるべき問い、 定的に解答さるべき問い、②分析して答えらるべき問い、 答は原始経典において一つの型を発展させている。即ち、 しい討論の仕方を教えたことを挙げている。教義についての問 の余地がない。 る問答はアビダルマの発達に大きな役割をはたしたことは疑問 Suttanipāta の中に「アジタ青年質問経」などの多くの質問経 このことは、 する者もあり、また弟子相互間で質疑応答がなされたであろう。 多種多様であった。聞法者の中には仏陀あるいは仏弟子に質問 仏教聖典中、その成立が最も古いと推定される 著者は原始経典において dialogue の発達をも (4)捨置さるべき問いという四 (3) (1) (2)

捨置さるべき問いと関連して、 panhabyakarana Tasa

第七章で著者は「四句分別

(4)

ーラッタプッタであることを明らかにしている。 に関説し、四句分別の先駆が六師外道の一人サンジャヤ・ ヴ

られた reasoning を dhammatakka と呼ぶようになった。 うになり、これに対して真理即ち四諦と縁起の理法にうらづけ にともない、外道が行なう「誤った reasoning」を意味するよ soning'を意味していた takka の語はアビダルマ的思考の発達 ない、takka という語の受けた変化を明らかにする。本来 'rea-第八章では原始経典におけるアビダルマ的思考の発達にとも

maka に受け継がれ、特に Yamaka においては多数の二者択 選択において、また mātikās の配列において有効であった。 であり、これは外道との対論において、或いは正しい教義 ③もう一つの特徴は二者択一的判断 (alternative judgement) は、一連の仮言記述の中に入れられた連鎖式 型に収約される。②原始経典における argument の型の特徴 jānāmi' 🚊 no a-manasikāra' を見るに至っている。(5)、③の論法は Dhammasangani や Ya. をさけるためであった。 二重否定の表現は、(i) na aham na をさけ、二重否定の表現が多用される。これはドグマ的な肯定 法は主として矛盾律にもとづいている。論理的な見地からは同 の型を分析し、次のように要約している。(1)原始経典の思考方 律は矛盾律と等しい。しかし原始経典では強意的な肯定表現 第九章で著者は原始経典にみられる reasoning と argument (hypothetical syllogisms) という形式化された論法の多用 ②の特徴は Kathāvatthu によく受け継がれ、仮言三段論 (iii) na an-attamana という!! (sorites) にある

的 命題 (alternative proposition) を見ることができる。

うと著者は言う。 や pure hypothetical syllogisms を容易に駆使しえたであろ 起の法に熟達した仏弟子達は mixed hypothetical syllogisms られる対論では、mixed hypothetical syllogisms が多用され や deductive reasoning (演繹法) も広く使用されている。 -q), p, hence, q の型は見られない。また analogy (類推法) -q⊃-p, p, hence, q または -p $\lor$ q, p, hence, q または -(p• るが、それは pUq, p, hence, q の型をとる。 これと等価の る論法を分析し、それを論理式で表わしている。原始経典に見 第十章においては原始経典の対論に注目し、そこで用いられ

そこに展開される対論を論理式で表わす。 発展をしめしている。続いて著者は の型が多用され、-(p·-q), p, hence, q の型も現われ、論法の やは p⊃q, -q, hence, -p ଧらい denying the antecendent た方法は大きな効果をあげている。 雑であり、議論を追うのに骨が折れるのであるが、著者が採っ 論理式で表わす。 Kathāvatthu の puggalakathā の論争は複 を取りあげ、そこに見られる我の存在をめぐる論争を分析 Kathāvatthu の puggalakathā と『識身足論』の「補特伽羅蘊 tental quantification  $\Xi(x)Fx imes U$  universal quantification (3x) Fx とが現われ、また mixed hypothetical syllogisms 第十一章ではアビダルマにおける対論を分析する。 著者は puggalakathā 「補特伽羅蘊」を訳出し、 「補特伽羅蘊」にみ には exis

> 型が多用されるがこの型は縁起の順観と逆観に熟達した者は容 易に使用できたであろうと著者は言う。 上の技術は劣ってはいない。そこでは pUq または -qU-p の られる対論は puggalakathā のそれほど複雑ではないが、

問答・対論に用いられる論理の構造を分析して来て、著者は次 る」と著者は言う。ハスーチスイで未得り が、「仏教思想の発達を実際に跡づけるための唯一の方法であ 考と密接に関係しており、仏陀のこの思考方法を見なおすこと 諦や縁起、無我、智慧、その他の仏教の教理は仏陀の否定的 考法によって自由を求め、真理を追求し、人間を探求した。 否定の構造にある。この否定構造は仏陀自身の否定的思考法 の如き結論を得ている。 即ち、 仏典中の教説・議論の特徴は (negative way of thinking) によってくる。 仏陀は否定的 以上の如くに、原始経典からアビダルマまでに見られる教義 四

と具体的にどのように関連しているか、換言すれば、仏教の個 が本書の Foreword で述べている如く、これは著者自身に残さ れているかは、本書の取り扱う問題ではない。A.K. WARDER 々の教義のうちに仏陀の否定的思考方法がどのように具体化さ れは本書によって十分に究明されているとは言いがたいが―― 四諦などの仏教の個々の教義が仏陀の否定的思考方法 (Motilal Banarsidass, Delhi, 1983, pp. xvi-241. Price Rs. 75/-) た問題であるが同時に研究者に投げかけられた問題でもある。

れ